

観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



有限会社タートル 代表取締役
亀谷 彰

能登半島の最北端、石川県珠州市三崎町に鎮座する須須神社は、古くから「奥能登の守護神」として信仰を集めてきた。創建は第十代崇神天皇の時代にまで遡ると伝わり、境内の森は国の特別史跡名勝天然記念物に指定されるなど、自然と信仰が一体化した聖域である。源義経ゆかりの宝物や、悪神退散を祈る「的打神事」といった伝統行事は、地域の歴史と文化を今に伝えてきた。須須神社は、奥能登の人々にとつ



て祈りの中心であり、精神的な拠り所であり続けてきた。

2024年1月1日、マグニチュード7.5の能登半島地震がこの聖域を襲った。最大震度7の揺れにより、修復を終えたばかりの鳥居や灯籠、狛犬が次々に倒壊し、本殿も半壊判定を受けた。

境内を象徴していた大鳥居は根元から崩れ、長い歴史を支えてきた建造物群は深刻な損傷を被った。地域住民に



倒壊した須須神社大鳥居、台座だけが残る

としては、生活基盤と共に信仰の拠点までもが失われるという、二重の痛みであった。

それでも人々は諦めなかった。震災直後から、須須神社の再建を核に地域を立て直そうとする動きが始まった。地元有志によるクラウドファンディングには全国から支援が寄せられ、目標を大きく上回る資金が集まった。さらに金沢の石浦神社など協力神社が出張授与を行ない、須須神社のお守りや祈禱札を通じて「離れていても祈りは届く」というメッセージを発信した。こうした取り組みは、単なる建物の修復



須須神社案内板

能登を伝える⑥ 奥能登の守護神・須須神社参拝 ～震災からの復興を象徴する祈りの社

有限会社タートル 代表取締役 亀谷 彰

にとどまらず、地域の心を再び結び直す営みとなっている。

復興の道のりは険しい。本殿や鳥居を元の姿に戻すには長い年月と多大な資金が必要だ。しかし、須須神社の再建は単なる文化財修復ではなく、「地域再生の象徴」として位置づけられている。震災で失われたものの大きさを思えばこそ、人々はこの神社を未来へと引き継ぐ決意を固めているのだ。

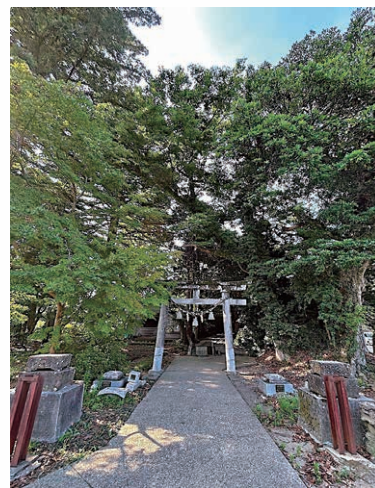
復興支援ツアーや地域祭礼の再開も、その流れを支えている。被災地を訪れる人々は、瓦礫の中に立つ社殿跡を目にし、同時に再建へ向けた強い意志を感じ取る。そこには「信仰を守りながら復興を成し遂げる」という地域の誓いが込められている。

奥能登に生きる人々にとって、須須神社は祈りの場であると同時に、未来を生き抜くための希望の象徴である。再び鳥居が立ち、拝殿に人々が集い、森に祭礼の声が響くその日まで、神社は地域の心をつなぐ灯火であり続けるだろう。

震災を乗り越え、新たな歴史を刻む須須神社の姿は、奥能登復興のシンボルとして、これからの世代に語り継がれていくに違いない。



倒壊したままの手水舎



須須神社参道



須須神社本殿



須須神社復興成就開運祈願絵馬



金沢大学・里山里海マイスタープログラム講義風景、講義の前日に須須神社参拝

須須神社
石川県珠洲市三崎町寺家 4-2



TATOL Home Page

連載

SERIES